



私が絵に興味を持ったのは、友達の家に行き一枚の絵を見た時でした。筆も持った事のない自分に描けるのだろうか心配でした。友人から背中を押され、心を決めて絵手紙教室に入会しました。親戚から大きい茄子を貰いそれを描き、先生に見ていただく、「自分の思いのままに描きなさい」と「アドバイス」。優しいお言葉でした。教室の皆さんがとても明るい方ばかりで楽しいです。なかなか上達しませんが、書く喜びが「脳トレ」にもなり、体の続く限り大坪先生のご指導をいただきながら皆さんに支られ楽しく描いていきたいと思っています。宜しくお願いします。



八女市吉田

田代 福美

八女農北山農場で小学生が農業体験

～夢たちばな子ども体験塾～ 八女農業高等学校

立花地区の小学生が年間を通してさまざまな体験活動を行う「夢たちばな子ども体験塾」を、8月20日本校北山農場で実施しました。八女市立花支所の主催で、立花地区の児童が参加しました。1・2年生はバター作り、牛のブラッシングや子牛の心音聴き、ポニーの乗馬、ヤギ・ウサギとのふれあい体験をしました。3・4年生はお茶の飲み比べや鶏舎見学、本校の鶏卵を使ったマヨネーズ作り、卵からヒヨコ誕生までの命の観察をしました。5・6年生はナシ・ブドウの収穫と糖度測定、ドローン操作やトラクタ・乗用モアの運転などを体験しました。本校生徒37名が先生役となり、体験活動の説明や指導を行い、小学生と楽しく交流しました。

この農業体験を通して、子どもたちは農業の楽しさや食・命の大切さなど、多くのことを学ぶことができたと思います。



ナシの糖度調査



バター作りと試食



牛のブラッシング



割卵(観察)

10月のみらい館営業日 毎週火・金曜 10時30分～15時30分
1日、4日、8日、11日、15日、18日、29日

健康よもやま話 ④④



姫野病院：松浦 緑郎
(健康管理士一般指導員)

● 老人性難聴

年齢を重ねるにつれて難聴を訴えることが確実に増えてくるものですが、この老化によって起こってくる難聴を「老人性難聴」といい、女性や子供の声といった高い音から聞き取りにくくなってきます。

ですから、高齢者が「近頃、嫁や孫の話す言葉が聞き取りにくくなってしまっね・・・」などと言うようになったなら、これは紛れもない「老人性難聴」の始まりかもしれません。

外耳から入った音は中耳を通して内耳に伝わり、蝸牛と呼ばれる部分の感覚細胞(有毛細胞)で電気信号に変えられ、蝸牛神経を通して脳へと送られて“音”として認識されます。

ところが音を感じる感覚細胞は歳をとるにつれて、その音響による負荷から脱落、減少していくので、当然、聞こえは鈍くなります。加えて、内耳に行く細い血管が動脈硬化を起こして血流が悪くなると、感覚細胞や聴神経に十分栄養が供給されなくなってしまい劣化、あるいは壊死、脱落してしまうこともあります。

このように感覚器官の加齢性変化に動脈硬化が加わることで感覚細胞の減少は加速され、聴力は一層低下するようになります。ですから、動脈硬化を促進させる脂質異常症や高血圧、糖尿病、ストレス、肥満、運動不足なども大いに関係があるのです。

いずれにしても高齢者は聴力をはじめ、さまざまな身体機能が不自由になってくると、家族から自分を遮断してしまい部屋にこもるようになってきます。ですが、これでは家族との会話はさらに減少し、外出する意欲さえも失われかねません。そして、このような刺激のない生活を続けていると、心と体の老化はより早くやってきてしまいます。

これを防ぐには家族の暮らしの中に自分を押し出すよう努力することです。また、聴力が落ちてくると会話も遠慮がちになるものですが、そうした場合でも家族や周りの人は、声が十分聞こえるようにゆっくりと発音するなどの優しい配慮が必要です。



第5回「ヤンマー建機感謝祭」開催

10月19日(土) 10:00～16:00

普段は体験することの出来ないショベルカーの乗車体験や記念撮影、工場見学ツアー、お子様に大人気の緑日コーナー、更には地元団体の演奏会や模擬店の出店、大抽選会など様々な催しを企画しております。また、筑後市の公式キャラクターであるパネコも招待しており、パネコと写真撮影もできます。皆様この機会に是非ご来場下さい。

会場：ヤンマー建機株式会社 本社工場
(筑後市大字熊野 1717-1)



体験コーナー



工場見学ツアー



アクセス：

【自家用車】 国道209号線「免許試験場」の信号を北に約500メートル
【公共交通】 西鉄バス「上町」バス停より徒歩2分

(駐車場の数に限りがありますので公共交通機関でのご来場にご協力お願いします。)

問合せ先：0942-53-5111

ヤンマー建機総務部 感謝祭担当

呟き

タイムスリップ

三十六年ぶりに高校の恩師と再会した。当時は教員はやほやの先生。私達は現代国語を教わった。脳裏に浮かぶのは若かった当時の初々しい先生の顔。けれど、目の前に座られているのは貫禄のある六十歳の先生。突然、三十六年前から「今」という未来へタイムスリップしたようだ。

「三十六年の間に世の中はすっかり変わってしまったね」。そうしみじみ話すお茶目な笑顔には当時の面影が残る。

「今は本を読む子があまり居なくなりました。スマホで読書なんかやっているもんね。新聞をとっている家庭も少ないよね」。一枚一枚ページをめくる楽しみ、インクの匂い、紙の手触り。私達が当たり前のように感じていた本や新聞のそんな趣きも、スマホやパソコンで読書をする人達には存在しない。新聞の情報はネットで得る人が増えた。

「お茶の間というのが消えたね」。テレビ番組はスマホのワンセグで観る人が多い。昔のように、テレビの前に家族が集まってお茶を飲みながら笑い合うなんてことも少なく、それぞれ自分の部屋にこもって好きな番組、またはYouTubeを観ている。

そんな話をしながら、すっかり私達は「今」にタイムスリップ。三十六年の間に一気に情報手段や文化が大きく変わってしまったけれど、どんなに簡素化、効率化した時代になってもSNS文字では表せない繊細な想い、文学や世の中への感動や好奇心は変わらぬに持ち続けたい。そう思いながら、先生と別れの挨拶をする。そして...

「先生、一緒に写真撮りましょう!」。そう言っ、私達は『スマホ』で『自撮り』しながらっこり笑った。次はどんな時代でお会いするかな。

森 志穂